

つばさこよみ

001

「——あつ、阿良々木くん……ん——あつ……」

「はあつ——は、羽川はねかわっ！……くっ——」

「……っつ……あつ——はあつ……」

「んっ——くっ、んっ、んっ、ぐっ……」

「っつ、あんっ、はあつ……阿良々木くんっ」

「くっ——ふっ、ふっ、んっ……羽川っ！」

生まれて初めてだった。

死ぬかもしれない、直前に。

死のうと思った、直後に。

だから。

僕は必死で、彼女の大きくて柔らかな暖かく、とてもいい匂いのする優しい胸に依存した。もちろんこれは僕の勝手な言い分だけれど、そうするしかない

かっただのだ。

絶すった。

揉みしだいた。

頬ほずりした。

舐めて——吸った。

五感を全て、集中した。

必死に。

救いを求めて。

ちよつと埃臭い、密室。

それは——マットの上だった。

「あ、阿良々木くん？ そんなにしたら、揉んだら

痛いよっ……あ……あんっ」

「ごめんっ、でもっ……羽川っ！」

「あは。おっぱい本当に好きなんだから」

「ごめんっ」

「もう、謝ってばかり……んっ」

「はあつ、はあつ」

羽川の中はとても熱かった。エピソードに彼女が

殺されかけたとき、触れた内臓——体内と同じ温度。まさか、また、この熱さを感じるとは思ってもいなかった。今はとても敏感な部分で触れている。とても敏感な部分と触れている。

密着して——

一つになつてゐる。

やわらかな——

熱く、血のかよつた——内臓。

濡れた、ぬるぬるの——粘膜。

現実逃避だつたのかもしれない。これから味わう恐怖から逃げたかつたのかもしれない。生きているものの、本能。

だから。

それでも。

今までも。

今でも。

彼女は僕を救ってくれた。

救ってくれている。

精神的に。

そして、肉体的にも。

いや、やはり精神的だつたのかもしれない。

僕は必死で彼女を求めた。

本能に基^もいて。

少しずつ高まつていた感覚が急激に変化する。

「くうっ！ 羽川っ！」

「んっ！」

そして僕は自分では制御できない、ものすごい快感の後に——一瞬意識を失なつた。

——快感の余韻がじわじわと続く。

暖かくて柔らかな羽川。

下半身の痺れるような快感。

急激に快感が薄れるのと反比例して意識がはつきりしてきて——思考が回復する。それでもまだ、羽川は柔らかく優しく——敏感な部分を包んでくれていた。

僕達の湿度と温度のせいで、彼女の眼鏡が真っ白

に曇ってしまったている。綺麗な瞳が見えない。呼吸は苦しいくらいに荒かった。お互いの名前すら呼ぶことができないくらいに。

「はあつ——はあつ、はあ……」

「はあつ、はあつ、はあつ」

……………

……………

呼吸を整える。

何度も、ごくり、と唾を呑み込む。

「はあつ、はあつ、はあ」

「はあつ、はあつ」

立ち上がれない。

……………

……………

僕は呼吸を整えつつ羽川を見つめていた。少しずつ眼鏡の曇りが薄くなる。レンズの透明度が上がり視線があらわになると、彼女は恥ずかしそうに一瞬目線を外す——けれど、すぐに僕の目をしっかりと

見て微笑んでくれて……二人で幸せな感覚をここでも共有する。

やつと苦しかった呼吸と心臓の鼓動が落ち着いてきた。

そんな中、羽川は明るい調子で、

「あつは、あまり——痛くなかったよ」

そんなことをあつけらかんと言った。

「あ、ごめん……そっか。そうだよな。女の子は最初痛いつていうもんな——僕、必死で……全然、優しくできなかった……」

「ちよつと乱暴だったぞ」

「ごめん」

「もー、私壊れちゃうかと思ったよ？」

「ごめん」

「それに……中でしちゃうし——赤ちゃんできちゃったらどうするの？」

はにかんで。

本当に嬉しそうに。

上目使いで僕を見る。

「——ど、どうしよう」

「えっへっへ」

羽川は緩みきつた笑顔で僕にぎゅつと抱き付いてきた。大きくて柔らかな胸が、僕にぴつたりと密着する。

とても気持ちいい。

彼女の鼓動が響く。

「——ご、ごめん」

「さっきから謝つてばかりじゃない」

羽川は僕の前髪をいじりながら言う。

「だって……」

「だから——だから、私……阿良々木くんを許さないことにした」

羽川の顔が、真面目になる。委員長長の顔だ。

「——だから……必ず帰ってきて。帰ってきたら、許してあげる」

でもそんな顔も長くは持たず——口はへの字にな

り、頬には涙が流れていた。初めて見たかもしれない、羽川の泣き顔。

「わかった。僕、絶対に戻ってくるよ」

僕は彼女の頭を撫でながら誓った。

「うん、そしたら……またエッチ——じゃない。ちゃんと言わなきゃね。えつと——セックスしよう？ また愛しあおう？ だから、だから絶対だからね」
そんな委員長に似合わぬ、らしからぬ台詞で僕を励ましてくれた。

僕はそんな羽川を強く抱いて、キスをして——約束をした。

戻ってきたら二人でいっぱい勉強しよう。

戻ってきたら二人でいっぱい遊ぼう。

戻ってきたら二人でいっぱいデートしよう。

戻ってきたら二人でいっぱい愛しあおう。

僕は春休みに童貞を喪失した。

人間という立場も喪失した。

羽川は、そんな僕を助けてくれた。

卑劣にも僕は彼女の身体を要求した。

最初は冗談だったのに。

僕も彼女も冗談だったのに。

卑怯になるくらい不安だったのだ。

暖かさが欲しかったのだ。

羽川翼は、そんな僕に抱かれてくれた。

人間ではない僕に。

吸血鬼の僕に。

——体育倉庫で。

キスショットと、殺し合う前に。

002

あまりにも唐突な話だが、僕は今日初めて会話をした女の子の家にあがりこんでいた。綺麗な女の子。美人の類である。今日初めて会話したのだから、勿^{もち}ろ

論、僕の彼女であるところの羽川ではない。女の子

は僕を部屋に上げたままシャワーを浴び！ 全裸で

脱衣所から僕の前に出てきて!! その美しい身体を

見せ付けた。お礼と称して。大サービスと称して。

その身体は、まあ、羽川より胸は小さい（ふふん）

けれど、スタイルは本当に凄い、女の子として完璧

なものだった。特に腰のあたりのくびれなんて、犯

罪的と言っても過言ではなかっただろう。

戦場^{せんじょう}ヶ原^{はら}ひたぎ

僕と同じようにクラスで浮いていた——いや、彼

女の場合は僕なんかとは違って深窓の令嬢だなんて

言われていて、浮いているというよりも近寄りがた

いといった感じだったけれど、実は怖い女の子だと

身をもって知ったのは、ついさっきのことだった。

信じられるだろうか？ 他人の頬をホッチキスで綴

じるという行為を。信じられるだろうか、優しさす

らも敵対行為と見做^{みな}すという言動を。

ついさっき、僕は頬をホッチキスで綴じられ、お

せつかいも敵対行為と見做された。

そんなことを平気でする女の子。

平気で全裸を見せる女の子。

重みの無い――

そうせざるを得なかった――

儂^{はかな}げな女の子。

しかし、まるでその儂さを補うかのような、この僕でさえ舌を巻く毒舌と暴力。言葉の暴力も物理的な暴力も妹達を相手にして慣れていると思っていたのだけれど――そんな生易しいレベルではなかったのである。

それはともかく。

戦場ヶ原は下着姿のまま、長い髪にドライヤーをかけている。その姿はとても綺麗で、羽川には申し分けないけれど思わず見蕩れてしまっていた。だって僕、健全な男子高校生だよ？　こんな完璧ボディのヌードを見せ付けられたら、誰だってそうなるよね？　でも、胸はやっぱ羽川の方が大きい（ふっ

ふっふ）。

「なんだか不愉快な想像をされているような気がするけれど」

「い、いや、そんなことないでふ！」

か、囁きました。うう、なんて鋭い女だ。

「……ま、いいわ。それよりも――阿良々木くん、羽川さんとよく喋ってるわよね？」

気持ちよさそうにドライヤーをかけながら、戦場ヶ原は当然のように尋問のような質問をする。

「あ、ああ。そうだな。まあ僕、一応副委員長だからな」

「そんなことを聞いてるわけじゃないわ」

「え？」

「片恋相手なんでしょう？」

「いや、それは違う」

「あらそう。てっきり」

「いや、一応、付き合ってるんだよ」

照れながら。

正直なところ、付き合っていることを言うべきかどうか少しだけ悩んでから答えた。なんとなくこのことは学校では秘密にしていたのだ。戦場ヶ原が片恋相手なんでしょう？　なんていうくらいだから、やはりうまく秘密にできていたはずだった。にもかかわらず付き合っていることを教えてしまったのは、忍野がよく言うように、こういうのには信頼関係が大事だから。決して惚気^{のろけ}たかったわけではない。決してクラスメイトに話す相手がいなかったためではない。妹達なんかに言ったら、何を言われるかわからないしな。

戦場ヶ原は一瞬、驚いたような表情をした。そして、すぐにわざとらしい言い方で、

「ええっ！　どうやって羽川さんの弱味を握ったの？」

——ま、この女なら、こうなるよな。さつきから僕のことを毒舌でいじめている、この女なら……：……つきり、おしとやかな深窓の令嬢だと思ってたのに——騙された気分。詐欺に引っ掛かるってこんな気

分なんだろうか？　女って怖い！

「なんでそうなるんだよ！」

「だってあなたみたいな童貞が、あの羽川さんと釣り合うわけなんでしょう？」

「童貞は関係ないだろう！」

「童貞じゃないというの？」

「い、いや、それは」

「ええっ！　阿良々木くんみたいな人が童貞じゃないなんて——わかったわ。羽川さんを手籠めにしたのね！」

「だからどうしてそんなに僕は乱暴な設定なんだ？」

まあ、かなり強引だったのは否定できないけど。

でも、二人は愛しあっていた。

相思相愛だった。

「何ニヤニヤしているのよ。気持ち悪い」

「お、お前、そんな言い方はないだろう」

この女、どれだけ僕のことを馬鹿にしているのだろう。確かに成績では僕はかなわない。この女、羽

川ほどじゃないにしても、確かに頭がいい。学年で七位なんて成績を澄まし顔で取ったりするんだよね。でも、だからってそんな言い方はないだろう。

「私を襲ったら許さないわよ」

「僕は羽川以外にそんなことしない！」

「——えっと、あの……簡単に引つ掛かかりすぎでしょう」

「……………」

「この変態！ やっぱ羽川さんを襲ったのね」

「だから！ 襲ったわけじゃないって」

「じゃあ、ラブラブなのかしら？」

興味津々の様子で綺麗な整った顔を近付けてくる。

僕はそれだけで簡単に動揺してしまう。だって羽川も自分の彼女ながら相当な美人で可愛いけれど、この女とは全然違うタイプだし。なんか戦場ヶ原は大人っぽいし、クールだし——

「い、いや、そ、それは」

「——ふんっ、なに惚気ているのかしら」

「べ、別に惚気ちやいないよ」

「あらそう。残念ね——この、私としたことが」

「何がだよ」

「何でもないわ。何でも——」

それから、しばらく戦場ヶ原は黙ってしまった。

——そもそもである。

そもそも、何故下着姿の女の子の前に僕がいるのか。そもそも、何故彼女でもない女の子の全裸を僕は見てしまったのか。ああ、羽川にばれたらどうしよう……なんて、ちよつと怯えながらも。いや、それはともかく、原因は『蟹』だった。怪異である。僕の『鬼』の次は、蟹だったのである。なぜ蟹が女の子を全裸にするのか。事の次第はややこしい複雑な事情も絡んでいたの、今ここでは明らかにしないけれど。

しかし、細かいことは明らかにしないといつても、結果だけは話をしておくべきだろう。

——結果として戦場ヶ原は蟹から、怪異から解放

された。さほど大きなイベントもなく（精々僕が戦場ヶ原のヌードを見たことくらい）、淡々と。僕の場合と同じように全ての問題を解決できたわけではなかったけれど、でも……それでも、僕はよかったと思っっている。そして、僕は戦場ヶ原といい友達になった。この結果の代償は羽川の機嫌（戦場ヶ原の裸を見てしまったことがバレ、一週間くらい電話にも出てくれなくて……泣いて土下座をして許してもらった。ちなみに、これは比喩的な表現ではない。むしろ控え目な表現）と、戦場ヶ原からの毒舌。

それでも僕は、この儂げな少女——戦場ヶ原ひたぎと友達になれて本当によかったと思っっている。

003

時系列を戻す。ゴールデンウィーク。戦場ヶ原が

落ちてく、前日までの話だ。

そう、あの毒舌ツンドラ女、僕の数少ない友達。クラスでは深窓の令嬢、あるいはクールビューティだなんて呼ばれている戦場ヶ原ひたぎとの出会いは、そんなドラマチックなものだった。僕に彼女がいなければ恋に落ちていたかもしれないくらいに。

ま、あの毒舌女は僕なんて相手にしてくれるとも思えないけどな。でも、話をしていけると、結構いい奴だったりするんだよ。まるで毒舌で照れ隠しをしているような感じ。

まあ、それはそれとして。

戦場ヶ原は学校の階段で足を滑らせ、僕の目の前に落ちてきたのだ。思わず僕はそれを受け止めて、彼女の秘密を知ってしまった。重さが、無いという秘密を。正確には全く重さが無いというわけではなく、五キロとのことだった。本来五十キロ（これを彼女の前で言う四十キロ後半強と訂正される）あるはずの体重が——十分の一になっってしまった。

重みを根こそぎ失っていたのだ。

その問題は忍野のおしの助けで（あのおっさんは自分で助かったなんて言うだろうけど）解決した……いや、今はゴールデンウィークの話だった。

そう、ゴールデンウィーク。

僕と羽川はキスショットと対決する直前、体育倉庫でのあの約束通りに、一緒に勉強して、一緒に遊んで——休日になると必ずデートをして……愛しあうようになっていた。つまり、このゴールデンウィークは毎日だった。自分から求めているながら、高校生にはちょっと早いなんて僕は思っていたところもあつたし、羽川もてつきりそういうタイプだと思っていたのだけれど。

良くいえば、ラブラブ。

悪くいえば、依存。

僕達は、互いに依存していた。

愛欲に溺れていた。

僕は怪異になってしまったことにより。羽川はそ

の複雑な家庭の事情により。僕は彼女の肉体に埋めることで、彼女は僕に埋められることにより充足していた。救われていたのだ。

「暦……気持ちいい——くふっ、気持ちいいよお」

「翼っ！ 愛してる、くっ……翼っ！」

「お願い……すぐ、いいの。もつとして」

翼が一番喜ぶ部分はおへそ側にあつた。だから僕はそこを重点的に可愛がる。僕の敏感な先端のくびれを撫でつけるたびに涙を浮かべながら僕に何かを訴えかけるような目で見つめてきて——大抵の場合は声にならない。このとき、おへその下側の柔らかなお腹を、そこから茂みのある盛り上がり、すなわち恥骨のあたりにかけてを優しく撫でながらすると、僕と翼は一番気持ちよくなる。物理的というよりも精神的なものだと思っけれど……優しいだけではなく、少し押すように強くしてもいい。

「くふっ……っ——んっ——」

「くっ！ ……ふっ——くっ、はあっ、はあっ」

「曆い、そこ……そこ……もつと、もつと」

「翼っ！　ここ？　ここだよな？　愛してる。愛してる……ずつとな、一緒だからな」

「うんっ、うんっ、うんっ！　……はあっ、はあ」

「くっ！　……くっ——くっ、くっ、んっ」

「——んんっ！」

……………

……………

「はあっ、はあっ、はあ……」

「はあ、はあっ、はあっ」

……………

……………

翼にのしかかったままの僕は余韻が名残惜しかったけれど、苦しげに息をしている彼女に負担をかけ続けるわけにはいかない。熱い彼女の中から引き抜こうとすると、ぎりぎりまで彼女の皮膚と粘膜の境目が、僕との別れを惜しむよう引つ張られて変形する——でも、彼女の「んんっ……」という声と同時に

に、彼女のそれはぬるつと元の形に戻り、僕のそれは外気に触れ、急な温度差を感じる。

翼は僕が離れると、横向きになって丸くなってしまう——まるでお腹の中の赤ちゃんのように。でも、彼女は息も絶え絶えといった感じで、ぐったりといった感じで。

「はあっ、はあっ、翼、大丈夫か？」

僕は彼女を撫でながら聞いた。

「はあっ……うん、ごめん……はあっ……ちよつとすごく……」

そんな息の荒い翼を撫でながら、ふとベッドの隅を見ると几帳面に畳まれた服と下着が目に入る。そういえば今日は可愛い系の私服だったな。「あまり私服持っていないんだけど、最近ちよつと増えてきちゃった」なんて、恥ずかしげに言っていたことを僕は思い出していた。そんな可愛い彼女が、今は、こんなにも乱れて——服の畳み方ひとつを見てもわかるように、きつちりとした真面目な委員長の中の委

員長である翼が……僕の前でだけ、こんなにも乱れてくれている。だからこそ、心の解放になるのだろうけど。

今日はラブホテルだった。国道沿いで、駅からちよつと離れたところにある、歩いて行ける距離のちよつと古びたホテル。高校生の予算的には割引時間帯でもあまり頻繁には行けないのだけど、声を我慢しないでもいいから全てを解放できるのと、やつぱりちよつと憧れていた部分があるから、僕も羽川もラブホテルはとても好きだった。やつぱり、その、えつちな設備もあるし……。

翼も落ち着いてきたようだ。やつとのことで起き上がり僕に寄りかかろうとすると、僕が彼女から零れ出してしまふ。

「あ、ごめん曆、ティッシュ取つて」

「僕が拭くよ」

「ちよつと！ 恥ずかしい！ やだっ」

さすがに恥ずかしかったみたいだけれど、彼女が

抵抗できないのをいいことに、丁寧に拭ぬぐわせてもらった。

「もおー、馬鹿っ……恥ずかしいんだからね——ちよつと、もー、あつ——んっ……そんなの——駄目だつてば……」

指で。

奥まで。

丁寧に。

ティッシュは僕の指を拭うために使つた。

……………。

翼がやつと起き上がる。僕が余計なことをしなれば、もつと早く起き上がったかもしれない。そんな彼女が僕の横に寄り添いながら耳元で言う。

「曆、吸血鬼になつちやつたせいなのか」

そういうえば三度目から僕達は名前と呼び合うようになつていた。こんなことをするときだけは。

「ん、なにが？」

「吸血鬼の魅了。人間が虜にされちゃうの」

翼はナイトテーブルに置いていた眼鏡をかけながら、乱れた髪をそのままに言った。

「んー」

僕はちよつと複雑な気分だった。でも僕を見る翼の目はとても綺麗で、上目使い（しかも、いつもより少し下にずらした眼鏡）で見つめられると、僕はもう思考を停止してしまう。こんな関係になつてい

るのに。いや、こんな関係になつたからか。

「魅入^{みい}られるつていうのかな。私、もう——」

むしろ——僕が魅入られているような気がするんだけど。

「翼——」

「あ、ごめんごめん。そんな顔しないで。暦のこと、ちゃんと好きだよ？ 愛してるよ？ でもね、やつぱりちよつとね。怖いのも」

「僕が——吸血鬼だから？」

「違う違う！ もう、そんなこと思うわけないでしょ！ やめてよ——ええとね、魅入られちゃった私

が怖い。自分自身がね」

「そつか……僕にはわからないけど」

「なんか、すごく嫉妬深くなつた」

「ああ、こないだクラスの女の子と話したら、しばらく機嫌悪かつたもんなあ」

「ごめんね」

「んー、でも僕は嬉しかつたけどなあ」

「なにそれ、変態っぽい」

翼はふざけてちよつと引いたような表情をする。

「ご存知ではありませんでしたか？」

変態紳士として振る舞う僕。

「嫌になるくらい知ってますけど」

委員長の中の委員長は、眼鏡を直しながら、わざと委員長つぽく言った。

「嫌だった？」

「んーん。んっ」

甘えながら蕩けるような深いキスをしてくる。僕の口の中が全部、翼の味になるくらい。

「はあつ——それに、私、ええと、えつちになった
と思わない？」

「あ、それはわかる」

「馬鹿！ でも、そういうことなんだよね——」

「でも、それは僕も一緒だよ。翼の前ではこんなに
甘えてるし」

「ほんと、おっぱい好きなんだから——でも、そっ
か。そうだよね」

「そういう意味では、まあ、お前もキャラ変わった
かな」

「キャラなんて変わってない。暦の前でだけ」

「ふふ」

「うふふ……んっ、ちよつと暦……また？」

「嫌？」

「んーん。もつとしたい」

「すつごい、ぬるぬるしてるよ」

「んふふ——っあんっ」

「なあ」

「ん？」

「ええとき」

「なあに？」

「その——後ろから、していい？」

「もおー、恥ずかしいんだよ？」

そんなことを言いながら、うつ伏せになって恥ず
かしそうにお尻をこちらに向けてくれる。

「ご、ごめん」

「もう……その、えつと——」

「ん？」

「いっぱい——気持ちよくしてね」

互いに魅入られた僕達はゴールデンウィークの間、
ずっと、延々と、こんなことばかりをしていた。

004

午前九時を過ぎていた。

母の日。

僕はこんな日は家に居づらいし、羽川も僕以上に面倒な環境だった。それでも、羽川は僕と出会った頃に比べて、随分と家族との関係が楽になったとのことだった。心を解放できる機会を得たことにより——それは僕も同じだったから、よくわかる。

羽川との約束の時間は午前十時だったけれど、色々とおつて僕は家を早めに出てしまった。まあ、母の日について妹に色々と言われて、逃げるように出てきたからなんだけど。

まあでも。

休みの午前中に、お気に入りのマウンテンバイク

で飛ばすっていうのもいいもんだ。でも、あまりにも早く着きすぎた僕は、とりあえず羽川の家の近くにある大きな公園で時間を潰すことにした。張り切りすぎて疲れたのもあったし。

——それにしても、この公園……誰もいないな。さつき小学生くらいの大きなリュックを持った女の子が居たけれど、すぐにいなくなっちゃったしな。道にでも迷っていたのか、公園の入口のあたりにある、この周辺の地図を見ていたようだけど。

まあ、誰もいない公園でも、やっぱり休みの日はいいな。特に羽川とこんな関係になつてからは別に学校が嫌というわけじゃないけれど、平日は羽川と一日中一緒にいられないから。

ああ、休日最高。

もうずっと休日になればいいのに。

「あらあら、公園に汚物を捨ててはいけないわね。なんなのかしら、この産業廃棄物は。あら、ごめんさい。よく見たら、これはこれは。えっと、誰だ

つけ？」

ここまで酷いクラスメイトへの話し掛け方って、これまでの人類の歴史上、存在したのだろうか。

「えーとな、どこから突っ込んだらいいか悩むんだけど、まずは名前からだ。僕は阿良々木だ」

「ああ、そうそう。知っていたわよ。えーと、そう。阿良々木くんじゃないの。影が薄いから忘れたりなんてしていないわよ」

僕はなんでここまでいじられなきゃならないのだろう？ どちらかというと、この女からは感謝されてもいいくらいだと思うのだけれど。

「あら、ごめんなさい。冗談よ？」

「ああ、いいよ。なんかお前の毒舌は、もう慣れたし、慣れなきゃいけないような気がしてるんだ」

「あらそう。それはつまらないわね」

「ええと、僕はどうリアクションすればいいんだ？」

「まあいいわ。リアクションに関しては期待してないから」

「そうすか。まあ、座つたらどう？」

「じゃ、隣、お邪魔するわね。女の子に優しいのね。さすが彼女持ちつてところかしら」

まったくどんだけ偉いんだ、この女は。可愛い格好しているのに。こないだの私服とは随分と違うじゃないか。大体、胸、強調しすぎじゃないか？ 露出は多くないけれど。僕は大好きだ。こんな格好。

思わず脳内で羽川の胸と比べてしまう。

「大体、折角女の子が可愛い格好をしているのに褒めることもできないような男に、リアクションなんて期待する方が間違っているわよね」

……この女、僕の脳内を読めるのか？ ていうか自分で自分を可愛いって！ 今日も戦場ヶ原さん、絶好調だな。

「あ、そういえば戦場ヶ原、こないだとは随分違う感じだよな」

「なにその言われたから仕方無く感満々の台詞。まあいいわ、阿良々木くんじゃあ、そんなものよね」

「そりや申し分けありませんでした。でも、本当、可愛いと思うよ」

なんだろう、こいつには割と、こんな台詞を言えたりするんだよな。

「ふん、見蕩れてくれたかしら？」

まんざらでもない様子の戦場ヶ原。よかった。これでキレられたら、さすがの僕もへこむからな。いい調子だ。

「ああ、正直、ちよつとな。見蕩れたよ」

「あらそう。嬉しいわ。羽川さんに報告しておくわね」

「お前！ 冗談でも止めろよな！」

本当、洒落にならないんだよ！ 羽川は！ 女の子のことに関しては本当に怖いんだからな！

「ふふ、どうしようかしら」

もう嬉しくて仕方がない様子の戦場ヶ原。この女、僕をいじめることが生き甲斐なんだな、きつと。

「つうか、なんでお前、こんなところにいるんだよ。こんな時間に」

「まあ、散歩といったところかしら。このあたりは私の縄張りだったのよ」

過去形なのは、戦場ヶ原は今、このあたりに住んでいないから。僕はこないだ彼女の家にお邪魔したから知っている。何故^{なぜ}、今、このあたりに住んでいないのかも。怪異がらみの話だったから、戦場ヶ原から教えてもらったのだ。いや、正確には怪異に出逢う元凶となる話というべきか。

「ああ、そつか、そういえば羽川と同じ中学だったよな」

「ええ、そうよ。ていうか阿良々木くんこそ、こんなところで何をしているの？」

「羽川の家に行く予定なんだけどな、早く着いちゃつてさ」

「ふうん、相変わらずラブラブなのね」

「まあ、うまくいつてるかな」

「また惚気ちゃつて」

「べ、別に惚気ぢゃないよ」

「そういえば、こないだの、お礼。していなかったわよね」

戦場ヶ原は立ち上がって、話題を変えた。こういうところ、強引なんだよなあ。

「ん、こないだ？ ああ、いいよ、そういうのは」

「あらそう。それはつまらないわね」

「どうせお前、お礼といつてもお礼参りよ。とかいつて、また僕をいじめたりするんだろ？」

「あら。それは面白そうね。まあ、折角だからそれは今度にしておくわ」

うう、余計なこと言わなきゃよかった……。

「本当、お礼はしたいと思ってるのよ。そうね、何か私にして欲しいことなんてあるかしら？ ある程度なら言うことを聞いてあげるわ。言っておくけれど、エロ方面は駄目よ。彼女いるんだから」

「お前な——」

僕は、あの地獄のような日々を思い出しながら本当にうんざりした表情を隠さずに言った。

「お前が不用意に、裸を見られた件を羽川に漏らしたせいで——僕がどれだけ怒られたのかわかってんのか？」

「意外よね。羽川さんがあそこまでするなんて。恋は盲目ということなのかしらね」

「なんか綺麗な台詞で誤魔化^{ごまか}そうとしようとしてるけど、そんなんじゃないからな！ 土下座したんだよ。マジ土下座だぜ。しかも本気で泣きながらだよ？ お前——あいつ、そのときなんて言ったと思う？ すごく冷たく——綺麗な土下座ね……。だよ。本気で怖かったよ！ 殺されるかと思ったよ！ お前……あれ、全盛期の忍より怖かったかもしれないぞ」

「なんだか——惚気られてるようにしか聞こえないけれど」

「どうやったらそんな解釈になるんだよ！」

「ま、過ぎたことはあまり気にしないことね」

「……お前のせいなんだけどな」

「でも、い・い・も・の。見せてあげたでしょう？」
 いいものつて！ てか、そんなに色っぽく言わ
 いでくれ！

「ま、まあ、そりゃあな」

「はあ——そんなだから彼女に怒られるのよ？」

「……………」

なんかもう、完全に弄もてあそばれてるな。

「あーあ。阿良々木くんは。大人なのよね」

「ん、どうしたんだよ」

「やりまくりなのよね」

「お、お前、そんな言い方——」

「童貞野郎だと思ってたのに」

もう勘弁してください！

「で、お礼なんだけど」

「あ。そうだ。羽川に余計なことを言わないでくれ
 ればそれでいいかな」

「あらそう。じゃ、一回だけ言わないであげる」

「一回だけかよ！」

「だって私がいじめないと、あなた、つまらないで
 しよう？」

まったく、この女は——

僕がため息について苦笑していると、小学生くら
 いの女の子が視界に入ってきた。

さつき地図を見ていた、リュックの女の子だ。

「なあ、戦場ヶ原。あそこに、公園の入口あたりに
 女の子いるだろ？ あの子の名前、つか苗字。な
 んて読むんだろうな」

リュックサックの名札には『八九寺真宵』とあつ
 た。学年は角度の関係で見えない。

「何を言っているの？ 見えないわよ」

ああ、そうか。僕の視力だから見えたのか。いつ
 も忘れてしまう自分の身体能力。まあ能力つっても
 微妙だからなあ。春休み、吸血鬼だった頃の能力な
 ら忘れるようなことはありえないのだけだ。

そして色々といじめられながら、からかわれなが
 ら、戦場ヶ原から読み方を教えてもらった。

『はちくじまよい』

なんかすごい名前だな。まあ、僕も戦場ヶ原も人のことは言えないか。

「なんかさ、あの子、さつきから迷子になってるっぽいんだよな」

「えっ？」

うーん、僕が行くしかないだろうな。女の子相手は女の子の方がいいんだけど、戦場ヶ原は面倒ごと嫌いそうだしなあ。

「ごめん、ちよつと僕行ってくるよ」

「あら、そう……」

なんだろう。そんなにテンションが下がるくらいに嫌なのかな？ 戦場ヶ原って子供嫌いじゃないんだけどなあ。うーん。

「どうしたー？ 道にでも迷ったか？」

大きなリュックを背負ったツインテイルの女の子。急に話しかけられて驚いたように僕のことを見ている。

「十五話、本当に放映されるんですかね？」

「いや、待て八九寺。お前、話の流れ無視してんじやねえよ」

「うるさいですよ。阿良々木さん。私は今Pとして、十五話のことで頭が一杯なんです」

「つか嘸めよ。つかかどうすんだよ、このSS」

「大丈夫ですよ、こんな無駄なSSなんて、誰もここまで読んでないですから」

「無駄とか言うなや！」

「まあ、それにしてもですよ」

「なんだよ」

「随分と好き勝手やってますねえ。この話、絶対アニメにできないですよね」

「まあ、SSだしな。つか戦場ヶ原も待ってるんだからさ、ちよつとは協力してくれよ」

「ええと、一応設定としてはですね……」

「設定とか言うなや！」

「設定としては私は既に浮遊霊なので、戦場ヶ原さ

んにも見えています」

「もうまよいマイマイでもなんでもねえ！」

いい話なのになあ。僕、一番好きなストーリーなのに。

「なら僕も出てもかまわんな」

僕の影から忍が出てくる。

「設定では、既にあるじ様と和解したことになっておる。ちよくちよく、あの委員長にちよつかいでも出すような設定にでもするかのか。カカツ」

「やめてくれっ！」

ああ、酷いことになってきちゃった。

「まあ、ちよつと長くなりすぎますからね。このあたりで締めておきます」

「はあ、そうすか……」

「そうじゃの。まあ、この場はミスドで手を打とうかの」

「わかったよ、忍。別にそんなこと言わなくても、いつもみたいにデートの途中でミスド寄るからさ」

「カカツ、ならばよいよい」

「じゃあ、わたしはお邪魔でしょうから、このあたりで退場します」

「いや、そんなことないって」

「いいですいいです。人の恋路を邪魔する奴は熊に蹴られて死んでしましますからね」

「それは即死っぽいな。まあ、馬でも死ぬだろうけど」

「ああっ！　しまりました！」

「ん、どうした？　八九寺」

「せっかくうまいこと言ったと思ったのに、私、既に死んでました！」

「お、お前！　それは、そういうネタは悲しすぎるだろう！」

「じゃ、そんなわけで。わたしはこのあたりうろろしているの、見かけたら話しかけてください！　というか傾物語次第ですけどー」

八九寺は元氣よく走り去ってしまった。色々なことをぐちゃぐちゃにして。メタにも程がある。

「じゃ、そんなわけでの。儂もとりあえず影に戻るかの。それにしても傾物語は……傾に係するののう……」

戦場ヶ原の方を向き、手を振ってから影に戻る忍。やたらと仲いいんだよな、こいつら。馴れ合いなんてせぬぞ。なんてこといつてた癖に。

……………

まあ、いいか。

えーと。

僕は戦場ヶ原のいるベンチへと戻った。

「阿良々木くん、彼女いるのにロリコンなの？ 忍ちゃんなんて、知らない人が見たら犯罪よ？ まあ、あの八九寺ちゃんも、かなりヤバそうだけれど」

「違うっ！ まあ、いつものおせっかいだよ」

「ふうん。やつぱり」

「ん、何がやつぱりなんだ？」

「なんでもないわよ。いえ、なんでもなくないわね」

「なんだよ、思わせぶりじゃん？」

「やつぱりおせっかいなんだな。つて」

「はは、そうかもな」

「阿良々木くん、私のことも助けてくれたじゃない？」

「まあ、僕は何もしてないけどな」

「あのときね。ちよつとキュンと来ちやつたのよ。」

私、昔から惚れつぽいのよね」

「……そ、そっか」

「でも、もう彼女居るし。残念ね。居なければアタックしていたのに」

戦場ヶ原は笑いながら、なんでもないことのように、自然に言った。こいつ、普段無表情なのに、こんな笑い方することあるんだなあ。

「……お前みたいな美人から、そんなこと言われるのは本当、光栄だよ。マジで、お世辞とかじゃなくでさ」

「んふふ、ありがと。まあ、阿良々木くんは見てるだけで面白いから、お友達として付き合わせてもらうわ」

「それだけでも光栄だよ。お前つてさ、結構——あ、羽川から電話だ。ああ！ 時間過ぎちゃってる。ごめん、行かなきゃ！」

「あら残念。じゃあね。羽川さん、可愛がつてあげるのよ」

戦場ヶ原は走り出そうとする僕に手を振ってくれた。その姿は年上のお姉さんみたいに思えて、ちょっとドキつとしてしまう。

僕は羽川からの電話に謝りながら手を振った。急いでお気に入りのマウンテンバイクに向かって駆け出しながら。